Best of ASCO®2019 in Japan みどころ

2019 年 7 月 6 日（土）

◆ 血液がん - Leukemia

講師 南 陽介 (国立がん研究センター東病院)

2000 年初頭以降に多発性骨髄腫治療に続々新薬が導入され、標準治療が大きく変わりましたが、今度は 1970 年代から変化のなかった急性骨髄性白血病の治療に big wave が訪れようとしています。本年の BOAJ 血液セッションの一大トピックは再発難治 AML に対する Flt3 阻害剤の有用性を調べた第 3 相試験の結果です。講師は南陽介先生がつとめます。

◆ 血液がん - Lymphoma / Myeloma

講師 山内 寛彦 (国立がん研究センター東病院)

学会直後の New England Journal of Medicine に掲載された CLL に対する bcl-2 阻害剤 Venetoclax ＋Obinutuzumab vs Chlorambucil + Obinutuzumab の第Ⅲ相試験、辺縁帯リンパ腫に対する新規 PIK3A 阻害剤 Umbralisib の第Ⅱ相試験、骨髄腫に対する anti-BCMA bispecific T-cell engager (BiTE) immunotherapy の First in human 試験の 3 トピックスを、山内寛彦先生がまとめます。

◆ Melanoma

講師 並川 健二郎 (国立がん研究センター中央病院)

今年はメラノーマに関する演題 2 題（#9500, #9501）を取り上げます。
メラノーマは脳転移が比較的多い疾患であり、脳転移の出現は患者の生活の質も生命予後も著しく悪化させます。このような脳転移に呈して、全脳照射の意義と免疫チェックポイント阻害薬の効果について議論したいと思います。臨床で直面する問題ですので、是非参加して議論に加わって頂ければと思います。

◆ Developmental Therapeutics

講師 久保木 恭利 (国立がん研究センター東病院)

Best of ASCO 部会委員の検討により、Developmental Therapeutics のセッションでとりあげる演題は下記の 2 演題に決定いたしました。

(Abstract 3003) Phase 1 study evaluating the safety, tolerability, pharmacokinetics (PK), and efficacy of AMG 510, a novel small molecule KRASG12C inhibitor, in advanced solid tumors.
これまで分子構造上の問題から薬剤開発が難しいとされてきた KRAS 阻害剤ですが、今回 KRAS G12C 変異に対する阻害剤 AMG510 の First in Human 試験において少数例ながら非小細胞肺癌に対して高い奏効割合を示したことが報告されました。今後、他の薬剤も含め KRAS 阻害剤の開発が加速していくことが期待されます。

(Abstract 2511) Regional delivery of mesothelin-targeted CAR T cells for pleural cancers: Safety and preliminary efficacy in combination with anti-PD-1 agent.
固形癌に対する CAR-T 療法はこれまで開発が難航していましたが、悪性中皮腫患者に対する mesothelin を標的とした CAR-T 療法の局所投与（胸腔内投与）に免疫チェックポイント阻害剤（抗 PD－１抗体）の全身投与を併用することにより、有害事象は軽度であり、高い奏効割合と持続効果を認めたと報告されました。

近未来の医療を垣間見ることができる Developmental therapeutics の分野は、今年も分子標的療法、免疫療法ともに目が離せません。エキスパートによる解説と議論に乞うご期待！

◆ 乳がん

- Adjuvant / 講師 原 文堅 (がん研究会有明病院)
- Metastatic / 講師 尾崎 由記範 (虎の門病院)

今回の乳腺ではアジュバント 2 演題、再発 3 演題を取り上げます。アジュバントは昨年プレナリーの TAILORx の追加解析結果(昨年に続き同日 NEJM）と GIM4 LEAD 試験（昨年 SABCS で日本から発表された AERAS と同じ、内分泌療法 5 年以降の追加効果を検証する第 3 相試験）を取り上げます。再発は新規抗 HER2 薬（margetuximab と neratinib）の第 3 相試験 2 つと MONALEESA7 試験（CDK4/6 で初めて OS 延長を示した、また閉経前での有用性を示し、同日 NEJM）を取り上げます。いずれも明日からの臨床に影響のある演題ばかりです。皆様の参加と熱い議論をお待ちしております！

◆ 肺がん

- Non-Small Cell Local-Regional / 講師 三浦 理 (新潟県立がんセンター新潟病院)
- Metastatic / 講師 林 秀敏 (近畿大学)

今年は日本から 4 人の演者（津谷先生、釼持先生、中川先生、瀬戸先生）が口演に登壇され、素晴らしい発表が行われました！残念ながら周術期の 2 演題は ASCO 指定演題に選定されませんでしたが、免疫チェックポイント阻害薬による術前療法とともに三浦先生にレビューをお願いしています。Metastatic は中川先生が発表された EGFR 遺伝子変異陽性肺がんを対象とした RELAY 試験を含む 4 演題を採択し、講師を林秀敏先生に依頼しています。実地診療が変わる試験結果も含まれており、要注目です。

2019 年 7 月 7 日（日）

◆ Sarcoma

講師　内藤　陽一（国立がん研究センター東病院）

今年の ASCO は 2 年続けてプレナリーに肉腫の演題が選ばれました。切除不能・転移肉腫の標準治療が変わるかと期待されましたが残念な結果でした。肉腫の臨床試験の難しさを痛感する出来事でした。この辺を含めて内藤陽一先生に講演していただく予定です。

◆ 泌尿器がん

講師　松原　伸晃（国立がん研究センター東病院）

注目すべき演題は、プレナリーに採択されたホルモン感受性の有転移前立腺癌に対して Enzalutamide を追加することの有用性を検証した ENZAMET 試験、および同様の検証を Apalutamide で行った TITAN 試験験です。今回のエビデンスにより “どのように日常診療を変えるべきか？” を皆様とディスカッションできることを楽しみにしております。

◆ Symptoms and Survivorship

講師　藤阪　保仁（大阪医科大学附属病院）

シスプラチンを含む化学療法における制吐療法として、標準治療にオランザピン 5mg を上乗せすることの有用性を証明した J-FORCE 試験の結果を、国立がん研究センターの橋本先生が ASCO2019 にて堂々とご発表されました。BOAJ2019 では本試験を含む 2 つの緩和領域の重要演題について取り上げます。どうぞお楽しみに！

◆ 婦人科がん

講師　原野　謙一（国立がん研究センター東病院）

今回の婦人科では 3 演題を取り上げます。

PARP 阻害薬関連で SOLO3 試験（化学療法とオラパリブの初の直接比較試験）と AVANOVA2 試験（PARP 阻害薬とベバシズマブの併用に関する初のランダム化試験）の 2 つ、高齢者対象の EWOC1 試験（婦人科領域では初の高齢者限定の卵巣癌初回化学療法についてのランダム化試験）の 3 つを取り上げます。いずれも興味深い演題ばかりで、皆様との活発な議論を通じて議論を深めたく御参加をお待ちしております！

◆ 頭頸部がん

講師　門脇　重憲（愛知県がんセンター中央病院）

今年は日常臨床に大きく影響を与える二つの abstract（#6000, #6003)を取り上げます。#6000 では KEYNOTE-048 試験の結果を受けて転移再発頭頸部がんに対して pembroliumab を日常臨床に如何に組み込むかを、#6003 では局所進行上咽頭がんに対して Gemcitabine+Cisplatin を含めた導入化学療法の意義を、深く議論したいと思います。

◆ 消化器がん

- **Gastrointestinal Cancer / 川上 尚人（近畿大学医学部附属病院）**
- **Hepatobiliary/Pancreas Cancer / 森実 千種（国立がん研究センター中央病院）**

消化器がんは昨年に引き続き、BOAJ としては「肝胆膵」と「消化管」の 2 セッション構成としました。肝胆膵領域ではプレナリーセッションで発表された Olaparib（POLO 試験, abst LBA4）や、胆道がんの 2 次化学療法として初のポジティブデータである mFOLFOX（abst 4003)も報告され、臨床に直結しうるものでした。それ以外にも示唆に富む捨てがたい報告が多かったのですが、その中から膵癌の補助療法としてゲムシタビンとゲムシタビン＋ナブ・パクリタキセルの比較試験の結果(abst 4000)をとりあげます。消化管がんは学会前にすでにプレスリリースされ注目されていた、胃がん 1 次治療で免疫チェックポイント阻害薬ペムブロリズマブを評価した KEYNOTE-062 試験(abstLBA4007)の結果が発表されました。複雑な試験デザイン、結果もあり色々と議論すべきことがありそうです。また、大腸がんでは周術期化学療法に関する演題がいくつかあり、high-risk Stage II に対する化学療法の期間(abst 3501)について皆さんと議論したいと考えています。